## 「この世の知恵と神の知恵」　　2014年12月23日

**コリントの信徒への手紙 一2章6節～9節。**しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、／人の心に思い浮かびもしなかったことを、／神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。

パウロは信仰に成熟した者たちの間では知恵を語る､その知恵はこの世の知恵ではなく、また支配者たちの知恵でもないと言っている。この世の知恵とは、コリント教会の分裂騒動に見られるように、自分と仲間の利益と栄誉を得ようとするための知恵であろう。自分の欲望を満たす自己顕示欲と言ってもいい。支配者たちの知恵とは、エルサレム神殿の権威ある指導者、ユダヤを支配したヘロデ一派、またローマ帝国の支配者らが現していた、人を抑圧する知恵であろう。パウロの時代、ローマ帝国は「ローマの平和」に向かって日の出の勢いであった。その知恵、力を「滅びゆく」と言っている。驚くべき視点である。永遠の神を問う者は地上のどんな知恵、力も一過性のものであると認識する。

主イエスは荒れ野で悪魔から誘惑された時、国々の栄耀栄華を見せられ「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と、地上の権力は悪魔にひれ伏すところで得られると誘われた。主イエスは「退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と宣言された。また、荘厳で、壮大なエルサレム神殿に感嘆の声をあげる弟子たちに、神殿崩壊を淡々と予告された。更に、神殿の衛兵に捕縛された時「剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言われた。神のみを神とするところでは、どんなに不動に見えても地上の一切は、滅びゆくはかないものであることを知らされる。

旧約聖書の箴言には「主を知ることが知恵の初め」と繰り返し書かれている。聖書の民は神を知ることが真の知恵であり、その知恵で神と結び合う救いを待望したのである。

パウロは、信仰に成熟した者が語るのは、隠されていた神秘としての神の知恵であり、それは、私たちに神と結び合う「栄光」を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものであると言っている。パウロは、主イエスの十字架をはっきり頭に描いている。十字架は隠された神秘の出来事、神の知恵である。それを、イザヤ書に書かれた二つの聖句から「目が見もせず、耳が聞きもせず、／人の心に思い浮かびもしなかったことを、／神は御自分を愛する者たちに準備された」と言い直している。主イエスの十字架による救いは、神が愛する者たちのために、世の始めから計画されていた。人を抑圧、支配し、自分を立てようとする者には理解できず、愚かであるが、神の知恵である主イエスの十字架に人知を超えた救いがある。

ご自分を捨てた主イエスの十字架に、罪の赦しという神からの「大いなる然り」が秘められている。キリスト教は、これを信じ、ここに立ち続ける信仰である。この信仰は世の全ての事柄を相対化し、神に結び合った喜びと確信が、自由と解放を約束してくれる。パウロはどこまでも、十字架につけられたキリストに集中している。